

活動報告

～「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウムへの参加を終えて～

第11回「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式に併せて開催された「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウムでは、「未来につなげる－気候変動と地球の現在（いま）－」というテーマで、府内の高校生を交えたパネルディスカッションが行われました。気候変動が次世代へ与える影響、そして、この瞬間も起こり続けている地球規模の問題を、若い世代がどのように考え、討議し、広く発信していくか。本当に有意義な機会となりました。

また、この国際シンポジウム参加に当たって、高校生は気候変動についての基礎から応用まで、3回の勉強会を通じて意見を交流し、学ぶことができました。

この報告では、国際シンポジウムに向けた勉強会から大会当日までを報告させていただきます。



この国際シンポジウムへは、京都府立北稜高校、京都府立洛北高校、京都市立西京高校、同志社高校の4校から11名の生徒が参加しました。北稜高校は、総合地球環境学研究所との連携授業「地球環境学の扉」を通じて4人の生徒が参加させていただけることになり、京都府地球温暖化対策課による指導のもと、国際シンポジウム参加に向けて準備を進めました。

○第1回事前勉強会「気候変動、地球温暖化対策の基礎研修」

令和元年12月19日（木）場所：京都府立洛北高校

第1回目の勉強会では、京都府地球温暖化防止活動推進センター事務局長の木原浩貴氏に御越しいただき、「気候変動」や「地球温暖化」について、基礎的な理解を深め、世界で起こっている事、課題となっている事を学びました。この勉強会の冒頭に、「資料に書いてあることを覚えるのではなく、自分の中での違和感やモヤモヤを見つけること」、という言葉に、生徒達からは多くの自由な発想や疑問が出てきました。

また、グレタ氏のスピーチや気候変動に関するニュースに触れる内容が宿題として出題されました。



○第2回事前勉強会「気候変動と Climate Justice」

令和2年1月11日（土）場所：京都府立大学稲森記念会館

第2回目の勉強会は、第1回目よりもさらに踏み込んだ内容ということで、国立環境研究所地球環境センター副センター長の江守正多氏に御越しいただき、「気候変動と Climate Justice」というテーマで講演をしていただきました。また、宿題であったグレタ氏のスピーチや気候変動に関するニュースについて、それぞれの意見を発表し合いました。なぜ日本のメディアは世界で起こっている気候変動による問題を取り上げないのか、なぜ今すぐにも脱炭素化を始めないのか、高校生の私達が今すべきことは何なのか。生徒達のような若い世代の中での「モヤモヤ」がより明確なものへと変わっていきました。



○第3回事前勉強会「気候変動の時代に何が問われているか：安全と正義」

令和2年2月1日（土）場所：京都府庁

最後の勉強会では、京都大学大学院地球環境学堂教授の宇佐美誠氏に御越しいただき、これまでの勉強会で気づいた事、感じたことを若者の代表として国際シンポジウムで発信できるよう、考えや意見の共有、整理を行いました。この頃には、生徒達からの気候変動に関する質問や意見が、自然と議論に発展し、大きな発信力をもった主張へと変わっていききました。



○第11回「KYOTO 地球環境の殿堂」国際シンポジウム

令和2年2月11日（火）場所：国立京都国際会館

第11回「KYOTO 地球環境の殿堂」国際シンポジウムでは、元アイルランド共和国大統領、元国際連合人権高等弁務官のメアリー・ロビンソン氏、気候変動に関する政府間パネル IPCC が殿堂入りされました。生徒達は表彰式に参加し、これから自分達が参加する国際シンポジウムの意義を再認識しました。

「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウムでは、勉強会で御話いただいた宇佐美氏、江守氏に加え、IPCC を代表して共同議長の田邊清人氏、企業を代表して株式会社 LIXIL の川上敏弘氏を交えたパネルディスカッションとなりました。登壇した高校生は、日本の環境教育の在り方や今の日本をつくってきた上の世代への主張など、若い世代を代表した発信を行ってくれました。高校生の発言に賛同した会場から、自然と拍手が起こった時は、本当に感動しました。

また、会場から北稜生2人が質問しました。環境教育に力をいれている北稜高校にとっては大きな一歩であると考えています。



今回の国際シンポジウムは、会場全体の年齢層は高く、気候変動に対する日本のメディアの関心もまだまだ大きくはありません。しかし、このように次世代を担う高校生の大きな発信力をもって気候変動、地球環境問題解決に取り組むことは、これからの日本、世界を変える大きなきっかけになると考えます。北稜高校では今後もグローバルな視野をもって環境教育に力を注いでいきたいです。

